

全国発芽マップ 2004

－ 中心栽培植物による活動とスモールプロジェクトの現状と課題 －

宮崎大学教育文化学部附属小学校 教諭 岩切 信二郎

shin-iwa@cc.miyazaki-u.ac.jp

宮崎大学教育文化学部

教授 中山 迅

e04502u@cc.miyazaki-u.ac.jp

キーワード：インターネット、学校間協働学習、植物栽培、電子掲示板

1. はじめに

全国発芽マップは、2001年度から「中心栽培植物」を育てる活動と「スモールプロジェクト」の2本立てという方式をとるようになった。今年度はその4年目である。「ひまわりプロジェクト3」、「ビオラプロジェクト2」「綿プロジェクト」「Water and Germination」「International Kenaf Club」「ケナフルームへようこそ」などのスモールプロジェクトがここに活気を帯びている。これらが「スモール」と言えないくらいに活性化してくると、個々の「スモールプロジェクト」だけに参加したいという希望者も出てくる。しかし、全国発芽マップでは、あえてそれを認めず、「中心栽培植物」の活動にも参加することを条件にしている。それは、共通の活動と話題を持つことで異種のスモールプロジェクト参加者間の交流が生まれるようにして、異種のスモールプロジェクトの参加者がお互いのスモールプロジェクトに参加しあうことによる活動の広がりを期待するからである。

スモールプロジェクトが4年目となった2004年度の現状と課題を探る。

2. スモールプロジェクトの継続性

2004年度は、2003年度までのスモールプロジェクトの多くが、若干の組み替えを経ながら継続している。そのため、年度が変わってもML参加者による交流や新年度の企画が、昨年度の活動を踏まえながら継続して議論され、実行されている。全国発芽マップ参加者が、スモールプロジェクトのみの参加ではなく、「中心栽培植物」の活動にも必ず参加することの意義は、このような年度を越えての活動の継続の中にもある。

今回の発表をサポートしてくれる岸本直樹先生・鶴飼節夫先生・太田真由美先生等のスモールプロジェクト・リーダーは、各スモールプロジェクトの掲示板運営、ML運営、種子の手配や配布、活動のコーディネート等を精力的に行っている。リーダーの活動として、植物の生育状況の報告、栽培方法の検討、栽培に関わる諸問題の検討などに携わっている。スモールプロジェクト・リーダーがこれだけの活動をしていると、もはやそれは「スモール」とはいえない教育活動に発展してくる。

今年度も、スモールプロジェクトの活動が単年度の活動に終わらず、年度を越えて継続される傾向が出てきている。年度が変わったときに前年度のスモールプロジェクトをそのまま継続するか、形を変えて継続するか、やめてしまうか、それともまったく新しい企画を提案するかは、スモールプロジェクト・リーダーが思案するところである。新しい企画を立ち上げようと考える人にとっても、どういった企画がスモールプロジェクトとしてふさわしいのかを、多くの人の意見を聞きながら相談する「場」が必要である。このときに、重要な役割を果たすのが、「中心栽培植物」の情報交換に使用している全体の「hatsuga ML」である。ここで、異なったスモールプロジェクトに参加している者同士が、他のスモールプロジェクトがどのような運営や提案をしているのかを伝えあうことができる。このような仕組みにより、特定のスモールプロジェクトのみで活動していた参加者が、他のスモールプロジェクトにも興味・関心を示し、そのスモールプロジェクトへの参加を希望していくという状況が生まれている。これが、全国発芽マップで強調されている「共通の活動と話題を持つことで異種のスモールプロジェクト参加者間の交流が生まれるようにして、異種のスモールプロジェクトの参加者がお互いのスモールプロジェクトに参加しあうことによる活動の広がりを期待する。」ことであり、それが実際の形となって現れている。

スモールプロジェクト・リーダーや、全国発芽マップに参加する教師がCECの成果発表会等で直接会うことは、本年度の運営やスモールプロジェクトの進め方や、次年度の新企画のアイデアを交換する絶好の機会となっている。今回のCECの成果発表会の発表者の岸本直樹先生・鶴飼節夫先生・太田真由美先生を始め、発表者以外もこの成果発表会に参加し、直接会う機会となっている。このような機会をとらえての直接対話によって、直面している問題の解決が図られたり新たな企画の構想が固まったりすることが、全国発芽マップの有意義な活動を支えている。

3. すべての活動を参加者がつくりだす文化

全国発芽マップには、「すべての活動を参加者がつくっていく」という共通理解に基づいた文化がある。その背景には、「児童・生徒と教師の能動的なかかわり合い」を大切にする基本的な考え方があり、さらに、全国発芽マップには、栽培する植物（2004年度の中心栽培植物はケナフ）などの自然そのものから直接学び、さらにインターネットを通じて接する「人々」から直接学ぶことを重視するという特徴がある。2004年度当初にこの趣旨を全国の参加校に確認するとともに、参加校からのスモールプロジェクトの提案を募った。中には、「International Kenaf Club」のスモールプロジェクトのように、日本全国にとどまらず、外国への参加を呼びかけるものもあった。その後、各プロジェクトのリーダー校が中心となり、種子の手配、参加校への配付、活動の工夫及び促進等を中心になって行っていった。現在も新たなプロジェクトのために種の配付等が行われており、年間を通した栽培活動へと発展しつつある。

4. 電子掲示板やML 交流から直接交流・国際交流へ発展する可能性

2004年度は、8月25日現在で250校が全国発芽マップに参加している。これまでの活動をふりかえってみると、全国発芽マップに参加している学校が中心栽培作物のケナフやスモールプロジェクトによる大根の栽培を進める中で、電子掲示板(図1)やML交流の活動から、直接交流(face to face)へと発展している事例もあった。例えば北海道勇払郡鶴川町の花岡小学校(平成16年3月閉校)の児童が三重県一志郡嬉野町立中郷小学校を訪問して交流したり、京都府京都市立有濟小学校小学校(平成16年3月閉校)と中郷小学校がお互いに訪問して交流したりする実践が行われた。最近、このように電子掲示板やML上での交流がきっかけとなって、直接相手のところに向向いての交流に発展するケースが少しずつではあるが増えてきている。

「地球クラブ」が中心になって進めている“International Kenaf Club”の掲示板等では、外国の人たちとの交流が続けられている。この企画は、英語を学習していない児童にも分かるように、画像によるコミュニケーションを中心にした掲示板(図2、図3)である。全国発芽マップの活動を日本国内だけの活動からグローバルな交流へと発展させる役割を担っている。

くきの長さは、9.5cmありました。もっとのびるようになっています。



図1 ケナフへの書き込み



図2 外国の子どもからの写真

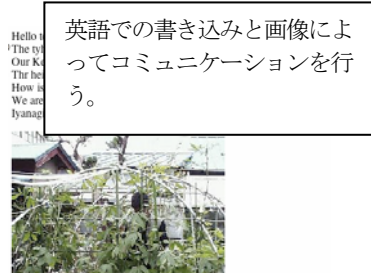


図3 英語での書き込みの例

5. 全国発芽マップにおけるボランティアの役割

全国発芽マップは、全体のホームページに加えて、各スモールプロジェクト専用の掲示板がある。ホームページには、参加校一覧、成長記録、ケナフデータベース、掲示板、スモールプロジェクト掲示板などの、全国発芽マップの活動に不可欠な内容が掲載されている。しかし、それらの作成や運営を幹事校のみで行うことには人的に困難な面がある。そこで、現在の全国発芽マップには、ホームページ作成や運営支援に携わるボランティアが存在して、全国発芽マップを支えている。しかし、このようなボランティアへの依存も継続して依頼できるものではないので、今後どのような見直しを持つかも課題となる。

6. 発芽マップ及びスモールプロジェクトの活動を通しての課題

全国発芽マップは、宮崎大学教育文化学部と同附属小学校が中核となる活動である。活動自体も10年目を迎えようとするほど継続した活動となっている。これほどまでに活動が継続しているのは、発芽マップに参加している先生や児童生徒が主体的に参加し、他校の児童生徒や先生方とのコミュニケーションを通して、疑問点や悩みを一緒に解決したり、新たな発見をしたという活動を進めていくという姿があるからである。

特に、スモールプロジェクトの活動においては、各プロジェクトのリーダー的存在の先生方の掲示板運営によって、各校とのコミュニケーションが図られている。そこには、観察記録や記録写真のやりとり等の活動が行われる。その活動の特質に基づいて、掲示板等への改善提案が挙げられるが、システムや運営面等をどう運営していくか、これから解決していかなければならない課題がある。また、各スモールプロジェクトの掲示板には、児童生徒が栽培活動や観察を報告したり、栽培活動における問題点を他校に相談したりする書き込みが行われる。しかしながら、なかには、不適切な書き込みが行われる可能性もあるので、その場合の対処法についてのマニュアルを作成し、発芽マップのメンバーで共通理解しておく必要がある。

さらに、全国一斉に種蒔き・栽培を行う中心栽培作物についても、1977年度から継続して栽培してきたケナフにするか、スモールプロジェクトで栽培されている植物を新しい中心栽培植物にするのかといった議論が4月中に行われた。長期間にわたって全国発芽マップの「看板植物」のようになった「ケナフ」を継続するか、新しい植物を中心に据えるかという問題は、全国発芽マップ全体の活動の性格を変える可能性があるだけに、参加者全体の知恵を集めて検討する必要がある。さらに、10年目という節目を迎えるにあたり、中心栽培作物や各スモールプロジェクトの運営面や財政面については、今後の活動を継続していくための課題となっている。

7. おわりに

2001年度以降の全国発芽マップは、「すべての活動を参加者がつくる文化」が「スモールプロジェクト」という形で提案され、発展してきた。そこで、全国各地で活躍された先生方の果たした役割は非常に大きいものがある。しかし先生方の勤務していた学校が閉校になったり、他校への異動や行政職への異動になったりという運命にある。これまで児童生徒とともに活躍された先生方の学校やスモールプロジェクト代表の先生方によって、いまの全国発芽マップ活動があるといえる。

全国発芽マップでは、それぞれの活動においてリーダーとなる先生が中心となり、創意工夫した取組を行ってきた。それらの先生方には、現在表向きに活動していない方もいらっしゃる。しかし、MLを通して的確なアドバイスをして頂いたり、以前の活動の様子について書き込みをして頂いたりすることで、発芽マップの歴史を知ることができる。表に出なくなっても参加者として背後で支えることで人的な層の厚さを実現できる活動である。今後も全国発芽マップの活動は、意欲のある教師の主体的で能動的な活動を支援し、魅力的な教育実践を実現する場になりたい。